

水滸傳大卸全卷

水上瀧太郎全集

一卷

昭和十六年三月二十日印刷
昭和十六年三月二十五日發行

水上瀧太郎全集 一卷

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄

東京市神田區一ツ橋三丁目三番地

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

目次

山の手の子	一
ものゝ哀れ	三五
ぼたん	八九
うすごほり	一三三
噂	一四五
賢さん	一七七
沈丁花	一九五

途すがら	二五五
その春の頃	三〇三
心づくし	四〇五
友だち	四三七
世の中	四三七
先生	四八七
海上日記	五九元
船中	六一
後記	一

山の手の子

お屋敷の子と生れた悲哀を、沁み々々と知り初めたのは何時からであつたらう。

一日一日と限り無き喜悅に満ちた世界に近付いて行くのだと、未來を待つた少年の若々しい心も、時の進行に連れて何時かしら、何氣なく過ぎて來た歸らぬ昨日に、身も魂も投出して追憶の甘き愁に耽り度いと云ふ果敢無い慰藉を弄ぶやうになつてから、私は私に何時も斯う尋ねるのであつた。

山の手の高臺もやがて盡きようと云ふだらだら坂を丁度登り切つた角屋敷の黒門の中に生れた私は、幼き日の自分を其黒門と切離して想起することは出來無い。私の家を終りとして丘の上は屋敷門の薄暗い底には何物か潛んで居るやうに、牢獄のやうな大きな構造の家が嚴めしい塀を連ねて、何處の家でも廣く取圍んだ庭には鬱蒼と茂つた樹木の間に春は梅、櫻、桃、李が咲揃つて、風の吹く日には何處の家の梢から散るのか見も知らぬ種々の花が庭に散り敷いた。そればかりではない、もう二十年も前に其の丘を去つた私の幼い心にも深く沁み込んで忘れられないのは、寂然した屋敷々々から、花の頃月の宵などには申合せたやうに單調な懶い、古びた琴の音が洩れ聞

えて淋しい涙を誘ふのであつた。私は斯うした丘の上に生れた。静寂な重苦しい陰鬱な此の丘の端れから狭いだらだら坂を下ると、カラリと四圍の空氣は變つてせゝこましい、軒の低い家ばかりの場末の町が帯のやうに繁華な下町の真中へと續いて居た。

今も靜に眼を閉て昔を描けば、坂の兩側の小さな、つゝましやかな商家がとびとびながらも瞭然と浮んで来る。赤々と禿た、肥つた翁が丸い鐵火鉢を膝子のやうに抱いて、睡た相に店番をして居た唐物屋は、長崎屋と云つた。其頃の人々には未だ見馴れなかつた西洋の帽子や、肩掛や、リボンや、種々の派手な色彩を掛連ねた店は子供の眼には寧ろ不可思議に映つた。其店で私は、動物、植物或は又滑稽人形の繪を切つて湯に浮かせ、つゝつゝと紙面に汗をかくのを待つて白紙に押付けると、其の獸や花や人の繪が奇麗に映る西洋押繪と云ふものを買ひに行つた。

「坊ちゃん。今度はメリケンから上等舶來の押繪が参りましたよ。」

と禿頭は玻璃棚からクルクルと卷いたのを出しては店先に擴げた。子供には想像も付かない遠い遠いメリケンから海を渡つて來た奇妙な慰藉品を私は何んなに憧憬を以て見たらう。油繪で見様な天使が大きな白鳥と遊んで居る有と有ゆる美しい花鳥を集めた異國を想像して何んなに懐かしみ焦れたらう。實際在來の獨樂、凧、太鼓、そんな物に飽た御屋敷の子は珍物好の心から

烈しい異國趣味に陥つて何でも上等舶來と云はれなければ喜ばなかつた。長崎屋の筋向の玩具屋の、私はいゝ花客だつた。洋刀、喇叭、鐵砲を肩に、腰にした坊ちゃんの勇しい姿を坂下の子等は何んなに羨しく妬しく見送つたらう。何時だつたか父母が旅中御祖母様と御留守居の御褒美に西洋木馬を買つて頂いたのも其の家であつた。白斑の大きな木馬の鞍の上に小さい主人が、兩足を踏張つて跨ると、白い房々した鬘を動かして馬は前後に搖れるのだつた。

「マア、玩具にまで何兩と云ふ品が出来るのですかねえ、今時の子供は幸福ですねえ。」

と御祖母様はニコニコして見てゐらつしやつた。玩具屋の側を次第に下つて行くと坂の下には繪雙紙屋が在つた。此の店には千代紙を買ひに行く、私の姉のお河童さんの姿も屢々見えた。芳年の三十六怪選の勇しくも物恐ろしい妖怪變化の繪や、三枚續の武者繪に、乳母や女中に手を曳かれた坊ちゃんの足は幾度もその前で動かなくなつた。就中忘れられないのは古い錦繪で、誰の筆か瀧夜叉姫の一枚繪。私が誕生日の祝物に何が欲しいと聞かれて、彼と答へたので散歩がてらに父に連れられて行つた時「之は賣物では御座いません」と六ヶしい顔の亭主が云つてから亭主を憎いと思ふよりも一層姫の美しい姿繪が懐しくなつた。其他其處らには呉服屋、陶器屋、葉茶屋、なぞがあつたやうだが私はそれらに付て懐しい何の思ひ出も無い。坂下も亦繪雙紙屋の側の熊野

神社、それと向合つた柳の木に軒燈の隠れた小さな煙草屋の外は矢張り記憶から消えて了つたけれども其の小さな煙草屋の玻璃棚が並べられて、僅に板敷を残した店先に、私の幼かつた姿が瞭然と佇むのである。

私の生れた黒門の内は、家も庭もじめじめと暗かつた。さる旗本の古屋敷で、往來から見ても塀の上に蒼黒い樹木の茂りが家を隠して居た。可成廣い庭も、大木が造る影に全體苔蒸して日中も夜のやうだつた。それでも流石に春は植込の花の木が思ひがけない庭の隅々にも咲いたけれど、やがて五月雨の頃にでもならうものなら絶間もなく降る雨はしとしと苔に沁みて一日や二日からりと晴ても乾く事ではなく、だゞつ廣い家の踏めばぶよぶよと海のやうに思はれる室々の上には蚯蚓の落て削ふやうなことも多かつた。物心つく頃から私は此の陰氣な家を嫌つた。そして時々たま乳母の背に負はれて黒門を出る機會があると坂下のカラカラに乾き切つた往來で、獨樂廻しやメ、コをする町の子を見て、自分も乳母の手を離れて、あんなに多勢の友達と一緒に遊び度いと思ふ心を強くするのみであつた。乳母は、

「町つ子とお遊びになつてはいけません。」

と瘦せた蒼白い顔を殊更眞面目にして誠めた。何故といふ事は無しに私は町つ子と遊んでは不可ないものだと思つて居る程幼なかつた。其頃私は毎晩母の懷に抱かれて、竹取の翁が見付た小さいお姫様や、繼母にいちめられる可哀さうな落窪のお話を他人事とは思はずに身にしてみても、時には涙を溢して聞きながら何時かしら寝入るのであつたが或晩から私は乳母に添寝されるやうになつた。

「もう直き赤さんがお生れになると、新様はお兄いさんにお成になるので、お母様に甘つたれてゐらつしやつてはいけません。」

と云ひ聞かされて、私は小さい赤坊の兄になるのを嬉しくは思つたが母の懷に別れなければならぬ事、事、悲さに涙ぐまれて冷い乳母の胸に顔を押し當てた。

間もなく母は寢所を出ない身となつた。家内の者は何かしら氣忙しさうに、物言ひも聲を潜めるやうになり相手をして呉れる事もなくなつた。私の乳母さへも年役に、若い女のともすれば騒ぎたがるのを叱りながらそわそわ立働いて居て私をば顧る事が少なくなつた。出産の準備に混亂した家の中で私は孤獨をつくづく淋しいと思つた。お祖母様のお氣に入で夜も廊下續きの隠居所に寝る姉も、其頃習ひ初めた琴を弾く事さへ止められて、一人で人形を抱へては、遊び相手を欲

がつて常は疳癩かんしかくを恐れて避けて居る弟をもお祖母様の傍そばに呼んで飯事まいごとの旦那様にするのであつたが、それも直きと私の方で飽が来てふとしたことから腕白いたづらざかりが出ては姉を泣かすのでお祖母様や乳母に叱られる種となつた。腕白盛いたづらざかりの坊ちゃんは「靜しずかにしてゐらつしやい」と云はれて人氣の少ない、室へやの片隅かたぐもに手遊品てあそびを並べても少時しばらく経つと厭いやになつて忙しい人々に相手を求めるので「ちつとお庭にでも出てお遊びなさい」と家の内から追ひ立てられる。

黒土くろつちの上に透間すゐまも無い苔は木立の間に形ばかり付いて居た小道をも埋めて踏めばじとじと音も無く水の湧出る小暗せくらい庭は、話に聞いた種いさぐ々の恐ろしい物の住家のやうに思はれ、自由に遊び廻る氣にはなれないので縁近い處で満みらなくすくむで居た。けれども次第に馴れて來ると未だ見ぬ庭の木立の奥が何となく心を引くので、恐こゝろ々ながらも幾年か箒目ほうめも入らずに朽敗くぱいした落葉を踏んでは、未知の國土を探究する冒険家のやうに、不安と好奇心で日に日に少しづつ繁つた枝を潜り／＼奥深く進入すいひするやうになつた。手入をしない古庭は植物の朽くちた匂におひが充みて居た。數知れぬ羽蟲は到る所に影のやうに飛とで居た。森閑しんかんとして木下間きのしたまに枯葉を踏む自分の足音が幾度か耳みみを脅おびした。蜘蛛の巢ねに顔を包まれては土蜘蛛の精を思ひ出して逃げかへつた。然し斯うして踏馴ふみなた道を知らず／＼に造つて私は遂に我家の庭の奥底を究めたのであつた。暗緑のしめつばい木立を抜け

るとカ、ラリと晴た日を充分に受けて、其處はまばらに結つた竹垣も何時か倒れては居たが垣の外は打立てたやうな崖で、眼の下には坂下の町の屋根が遠く迄晝の光の中に連つて居る。その果てに品川の海が眞蒼に輝いて居た。今迄思ひもかけなかつた眼新しい、廣い景色を自分一人の力で見出した嬉しさに私は雨さへ降らなければ毎日一度は必ず崖の上に小さい姿を現はすやうになつた。そして馴るに従つて日一日と何かしら珍しい物を發見した。熊野神社の大鳥居も見えた。三吉座といふ小芝居の白壁に幾筋かの眞負幟が風に吹かれて居るのを、一様に黒い屋根の間に見出した時は殊に嬉しかつた。芝居好の車夫の藤次郎が父の役所の休日には私の守をしながら、「乳母には祕密でせぜ。」

と云つては肩車に乗せて其の三吉座の立見に連れて行く。父母と共に行く歌舞伎座や新富座の緋毛氈の美しい棧敷とは打つて變つて薄暗い鐵格子の中から人の頭を越して覗いたケレン澤山の小芝居の舞臺は子供の目には反つて不思議に面白かつた。殊に大向ふと云はず土間も棧敷も一齊に眞負々々の名を呼び立て、若しか敵役でも出ようものなら熱誠を籠めた怒罵の聲が場内に充滿になる不秩序な賑やかさが心も躍るやうに思はせたのに違ひない。私は藤次郎の云ふまゝに乳母には隠れて度々連れて行つて貰つたものだつた。静寂な木立を後にして崖の上に立て居ると芝居

の内部の鳴物の音が瞭然と耳に響くやうに思はれて彼の坂下の賑はひの中に飛で行き度い程一人ぼつちの自分がうら淋しく思はれた。

それは確に早春の事であつた。日毎に一人で訪づれる崖には一夜の中に著しく延びて緑を増す雑草の中に見る限りいたいた草の花が咲いて居た。其草の中にスクスクと抜出た虎杖を取る爲に崖下に打續く裏長屋の子供等が、嶮しい崖の草の中をがさがさあさつて居た。小汚ない服装をした鼻垂しではあつたが犬のやうに輕快な身のこなして、群を作つて放肆に遊び廻つて居るのが遊相手の無い私には何んなに懐しくも羨しく思はれたらう。足の下を覗くやうに崖端へ出て、自分が一人ぼつちで立つて居る事を子供等に知つて貰ひ度いと思つたが此方から聲を掛ける程の勇氣もなかつた。全く違つた國を見るやうに一舉一動の掛放れた彼等と、自分も同じやうに振舞ひ度いと思つて手の届く所に生えて居る虎杖を力充分に抜いて、子供達のするやうに青い柔い莖を噛んでも見た。しくしくと冷め度い酸い草の汁が蟲齒の虚孔に沁み入つた。

斯うした果敢ない子供心の遺瀨なさを感じながら日毎同じ場所に立つ御屋敷の子の白いエプロンを掛けた小さい姿を、やがて長屋の子等が崖下から認めた迄には、如何にかして、自分の存在

を彼等に知せようとする瓦を積んでは崩すやうな取り止めも無い謀略が幼い胸中に幾度か徒事に廻らされたのであつたが遂々何の手段をも自分からする事なく或日崖下の子の一人が私を見付けてくれたが偶然上を見た子が意外な場所に佇む私を見るとさも吃驚したやうな顔をして仲間の者にひそひそと私語く氣配だつた。かさかさ草の中を潛つて居た子供の顔は人馴ぬ獸のやうに疑深い限付で一様に私を仰ぎ見た。

其の翌日。もう長屋の子と友達になつたやうな氣がして、何日もよりも勇んで私は崖に立つて待つて居た。やがてがやがや、列を作つてやつて來た子供達も私の姿を見て怪しまなかつた。

「坊ちゃん、お遊びな。」

と軽く節を付けて昨日私を見付けた子が馴々しく呼んだ。私は何と答へていゝのか解らなかつた。「町つ子と遊んではいけません」と云つた乳母の言葉を想起して何か大きな悪い事をしてしまつたやうに心を痛めた。それでも、

「坊ちゃんお出でよ。」

と氣輕に呼ぶ子供に誘はれて、つい一言二言は口返へしをするやうになつたが悪戯子も、流石に高い崖を攀登つて來る事は出來ないので大きな聲で呼び交すより詮方が無かつた。

此様な日が續いた或日、崖上の私を初めて發見した魚屋の金ちやんは表門から町へ出て來いと云ふ智恵を私に與へた。暫時は不安心に思ひ迷つたが遊び度い一心から産婆や看護婦にまじつて乳母も女中達も産所に足を運んで居る最中を私の小さな姿は黒門を忍び出たのである。曾て一度も人手を離れて家の外を歩いた事の無かつた私は、烈しい車馬の往來が危つかしくて、折角出た門の柱に嚙り付いて不可思議な世間の活動を臆病な眼で見居るのであつた。

麗な春の晝は、勢よく坂を馳下つて行く俵の輪があげる輕塵にも知られた。目まぐるしい坂下の町を暫眺めて居ると天から地から滿ち溢れた日光の中を影法師のやうな一隊が横町から現はれて坂を上つて來た。

「坊ちやんお遊びな。」

、と遠くから聲を揃へて迎ひに來た町つ子を近々と見た時私は思はず門内に馳込んで了つた。汚ならしい着物の、埃まみれの顔の、眼ばかり光る鼻垂しは手手に棒切を持つて居た。

「坊ちやん、お出でな皆で遊ぶからよ。」

中では一番年増の金ちやんは尻切草履を引ずつて門柱に手を掛けながら扉の陰にかくれて恐々覗いて居る私を誘つた。坊ちやんの小さい姿は町つ子の群に取巻かれて坂を下つた。